
ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

ローズクォーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

【Nコード】

N4570Z

【作者名】

ローズクォーツ

【あらすじ】

友達がいらない奴をあなたはどう思う？

友達なしで中学時代を過ごし、高校生になっても作る気がまったくない篠崎千遥ちさかに近づく同学年の男子・永島龍斗ながしまりゅうと。

龍斗は学年でも無駄にモテやがる奴（千遥・談）で、性格も良い。そんな奴大っ嫌いだ。

そんなひねくれ女子に近づく変わりもの男子の少しシリアスなラブコメディー？

R15をはずしました。ただ小学生の皆さんは千遥の言葉遣いを絶対に真似しちゃダメだよ。もちろん中学高校生も。

一話（前書き）

初めての投稿で、少し変な文があるかもしれませんが。また、学生なので低クオリティーな小説です。

一話

「ねえ、私に近付かないで欲しい。」

その言葉を言っても貴方は私に近付いて来る。

数日前、私は図書館で勉強をしていた。

頭は良い方だが高校に入っても友達を作らず、いつも孤立していた。

ちよくちよく話かけに来る人もいるが、本や勉強に集中したので、適当に話を済ませるので友達となるものはいない。

友人がいなくて寂しい奴と思われがちだが、そんな事はどうでもいい。

高校生活なんてたかが3年程度。

青春を無駄にするな、と入学当時に言われたがむしる学校に通うのが無駄だと思う。

勉強なら塾や家でも出来るし、芸術など生活の役に立つだろうか？

こんなことを中学時代に教師に言ったら、コミュニケーションがどうのここの言っていた。

まあ、そんな事だろう。

所詮人間は自分勝手に『あの人がムカつく』『あの人頭がおかしい』
だの陰口を言ったり、最悪気に入らない人を殺したりする。

そんな人間関係だったら私は嫌だ。

私、篠崎千遥しのざきちるかほはものすごくひねくれていると自覚している。
こんな性格が最悪な奴と一緒にいても楽しくないだろう。

だから、自ら他の人と距離を置いていたのに。

まったく、馬鹿で変わっている奴だ。

一話（後書き）

変な文章ですみません。

誤字脱字があれば教えてください m () m

一話

さて、舞台は数日前の図書館となる。

勉強をしていると隣の方に人の気配を感じた。

べつに変な能力は持っていない。私の視野に入って来たからだ。

そいつは小声で私に話しかけて来た。もちろん聞こえないふり。

そしたら奴は肩を軽く叩いて来た。モチ、無視。

奴はあきらめたのかどこかに行った。よし、勝った。

適当に勉強を切り上げ、図書館を出た……、はずだった。

誰かが私のブレザーの襟を掴みやがった。

「ぐうっ」と声を上げた私は誰だ、と思いながら後ろを向いた。

…ヤバっ。さっきの奴だ。

驚いていると奴は「やあ、やっと気付いたね。」と笑いかける。

そして驚いている私を見て「やっぱり無視していたんだ。どうしてだい？」

「べつに私にはお前に話すことはない。だからさっさと失せる。」

その話し方に驚いたのか奴の手が私の襟を離す。

そりゃそうだ。私は今、眼鏡を掛け、制服は着崩すことなくいわゆる優等生っぽい格好だ。まあ頭は良い方だが。

襟を離した隙に逃げようとしたが、今度は腕を掴まれた。

「待つて、逃げないで。君と同じ学校の生徒だよ。」「そんなの服みりゃわかるに決まっているだろう!」「そうだけど。ちょっと話しがあるんだけど……。」

そう言われ私は仁王立ちして「3分以内に話せ。簡潔にな。」と言う。

「偉そうな子だな。噂と全然違う。」

「噂はあくまで噂だ。と言うよりどんな噂だ。」

「君は篠崎さんだよ。」「ああ、まあ一応。」

「一応つて……。えっと対人恐怖症で気が弱い。孤立していて成績が良い。……みたいなの?」

「後半は合っているが前半が違う。べつに人と話すのは全く怖くない。」

「あと俺と話すかぎり気が強い。」

「……。」

「ああ、ごめんごめん。」

私が傷ついたような顔（演技）を見て慌てて謝ってくる。

「で、用件は?」

ケロツとした顔でそう言うと、悔しそうな顔をする。「演技か……。」

ああ失礼だけど君って親しい人とかいないよね。」

「まあな。べつに気にしていないが……。」

「じゃあ友達になる。」

「断る！」

「え！即答！なんで！どうして！」

「テンションがウザい。あと、『なる』って言ったときの
クガムカついた。」

「友達になろう。」

「普通に言っても駄目だ。じゃあ、バイバイ。」

「あつ、待つ…。」

腕を振りほどいて私は走り出す。

幸い図書館から駅まで近いのですぐに階段を駆け上がり、振り返る。

奴は追って来なかった。

「はあ、はあ……。よかった。」

私は息を切らしながら電車に乗った。

三話

電車は空いていたので座ることが出来た。

それにしても……、今日は疲れた。

だってテンションの高い馬鹿に絡まれ、拳げ句全力疾走だもん。

もうヤダ、泣きそう。

……そういえば奴は私と同じ学校って言ってたな。

でも今日パツと会っただけだし、話しかけられたら無視すりゃいい。

そう自分で納得し、ちょうど降りる駅に着いたので電車を降りる。

駅の中の本屋で参考書を探す。前から欲しかった本はなかったが、新作の参考書が出ていた。

どこかの有名大学の教授が書いた英語の参考書であった。興味が出たので、買ってみることにした。

店員に金を払い、商品をもらう。少しパラパラとめくり内容を確認する。

結構簡単な感じだったが丁寧に解き方などが書いてあり、なかなか良い本だ。

家に帰ってじっくり読むことにした。

四話

最寄駅から5分ほど歩くと私の家がある。

駅が近いので多分土地は高いだろうな。

私には関係ないがな。

さて、家に着いた私は鍵を開ける。

「ただいま。」と、言っても誰もいない。

私には物心ついた時から母親がいない。

父親から聞いた話しだとなんか離婚したっぽい。

まあ、父と母はその程度の関係だったのだろう。

私は母親に会いたいとも思わない。

そんな私だから性格は最悪なのだろう。

とりあえず私は適当に洗濯物を取り込み、夕飯の下ごしらえをする。

家事は割と出来る方だと自負している。

あらかた家事を終わらせた私は買って来た参考書を開く。そして勉強をやり始めた。

2時間ほど勉強してから腹が減ったので、夕飯を食べた。

父親はいつも夜遅くに帰って来るので、ラップをかけておく。

腹が満ちたので少し眠たくなったが、明日も学校なのでシャワーを浴びる。

風呂に浸かると水道代がかかるし、少し面倒だ。

髪を乾かし、明日の授業の準備をする。

特に見たいテレビ番組もないし、友達がいないので電話やメールのやり取りもないし寝よう。

ベッドに入り目覚ましを5時半にセットする。

ベッドが私の体温で温かくなった頃、私の意識は飛んだ。

五話

シリリリリリ!

不快な目覚ましの音が私の耳に入ってきて来る。

手を伸ばして音を止める。

時計を見ればちょうど5時半で私は起きなければならない。

顔を洗い、口をすすぐ。

台所に行けば、空になった皿が机に置いてあった。

それらを洗い終わらせて洗濯物を洗濯機に入れてから弁当を作る。

朝食は弁当の余り物を適当に食べた。

食べ終わってから歯を磨き制服に着替える。

洗濯が終わったらしく洗濯機からピーっと音が鳴る。

洗濯物を干し、外を見れば太陽が少し顔を覗かせていた。

今日は晴れそうだ。

そう思いスクールバックを肩にかけ、革靴を履き家を出た。

うっとうしいほど朝日が降り注ぐ道を、私は駅に向かって歩き出した。

六話

駅に着いて改札口に定期を入れてプラットフォームに入る。

電車は数分後に来た。やや混んでいたが、空いている座席が一人分あったので座る。

何駅か過ぎてだんだん学生やサラリーマンが多くなってくる。

サラリーマンの中にもものすごく疲れている感じのおっさんがいて、ちょうど私の前に来て『俺疲れていますから座席譲って下さい』アピールしていたが、無視する。

私だって疲れているんだ。

そう思っているとおっさんのアピールが終わった。

つくづく思うが私って性格最悪だな。たぶん結婚とか出来ないタイプだよ。

ほら、男子とかって優しい子とか気遣いが出る子が好きな人多いし。

まあ恋愛とかどうでもいいしな。

そんな事を考えていると降りる駅に着いた。

さて、学校に向かうか。

七話

学校に着いた瞬間、少し油断していた事を私は後悔した。

教室に入ると昨日の奴がいきなり現れた。

「っ！」

「おはよう。昨日はいきなり逃げるなんて酷いな。」

と、奴は言う。そして……

『ビシッ』

額に小さな衝撃が走る。デコピンされた。

「！！！」

「お仕置きだよ。人に話しかけられたらちゃんと答えようね。」

「知らない奴に話しかけられたら逃げろって習っているが？」

「ちゃんとこの学校の生徒だって言ったじゃん。」

「同じ学校って言っても知らない奴だし！」

「俺は3組25番の永島龍斗です！」

「ご丁寧にありがとよ！でも今やることじゃねえ。」「龍斗って呼

んで。甘える感じで」

「断る！」

ギャーギャー騒いでいると他の生徒の視線が私達に向けられる。

そりゃそうだ。私はほとんど騒がないし、言い争っている相手はそれなりに美形だ。

女子が少し陰口叩いたの聞こえたぞ。つたく女子は。

騒ぐのに夢中で時間が確認出来なかったが、ある程度時間が経った

のだらう。

S H Rが始まる5分前のチャイムが学校内に響き渡った。

永島って言うヤロー「じゃあね。」と言って、自分の教室に戻った。

八話

S H R が終わった後私に更なる災難が降り注ぐ。

「ねえ、永島君とどういう関係？」

そんな質問の嵐だ。

よくある『私らのイケメンに地味な女が話すんじゃないよ。』的な感じだ。

「永島つて……？」

「朝、あなたと話してたじゃない。とぼけないで。」「ああ、べつに他人？だと思っぞ。」

「じゃあ……っ」

「千遥っ！」

私の名前を無断で呼び捨てで呼ぶ声が聞こえてきやがった。

すると、私の目が眼鏡の上から塞がれる。

「だ〜れだ！」

「ハイテンション馬鹿？」「ハズレ！」

「じゃあ、いろんな意味で変態野郎？」

「ハズレ！つてなにげに酷いこと言っな。」

「私から見たお前の印象だからしかたがない。」

「……っ！まあそれは置いといて。」

「置いておくんだ……。」「そういえば、用件があつてね……。」

「なんだ？」

「友達になろうか。」

「ことわ……って昨日断ったけど。」

「答えが変わると思ったから。」

「変わらねーよ。」

ぴしゃりと叩きつけるように奴に言った。

いい加減私にかかわるのをやめて欲しい。

そしたら、

「だって君に興味持ったんだよ。明らかに他の子と違うし面白そう。」

「その興味の対象を勉強に向ける！成績上がるぞ！」
「そうじゃなくて……。」「じゃあなんだよ！」

ゼエゼエと息を切らし私は言う。

奴はそんな私を見て私の頭を撫でる。

「触るな！」
「いいじゃん。大型犬に威嚇する小型犬みたいな？」

「はあ？」

まさかの発言に驚く。小型犬？まあ私は奴に比べると小さい。

でも、人が一生懸命断っているのに。

「とりあえず……。」

「はあ……、なんだ？」

「メアド交換しよう。」

「ケータイ持ってない。」「じゃあ胸ポケットに入っているものは

何かな？」

「あつ……。」

クソっ…胸ポケットに入れるんじゃなかった。

「じゃあ……。」

「あつ……。」

私のケータイを取り赤外線通信らしいもので勝手に交換してしまった。

八話（後書き）

少しずつですが読んでくれる人が増えて嬉しいです。
投稿数は日によって変わります）（；

九話

無理矢理メアド交換した後の休み時間、私にこれ以上ないくらいの
災難（質問攻め）が降り注ぐ。

「メアド交換までしてただの他人とは言わないでしょう。一体どんな関係？」

「知らねー！！」

いきなり私が怒鳴ったのでさっきの質問攻め女子が怯んだ。

「さっきのやり取り見てたよな？私はべつにやりたくてメアド交換したわけじゃないの！いい加減気づきなよ。あっちが一方的にこっちに来ているの。だから質問するなら向こうにいきやがれ！！」

ついついカツとなってしまうた。相手の女子はびっくりした顔で私を見てた。

ついでにクラス内は困惑した雰囲気にも包まれている。

（ヤバい。すごく気まずくなった。）

私がどうするか悩んでいると、授業始まりのチャイムがなった。

とりあえず授業が始まるからひとまず大丈夫だろう。

急いで教科書やノートを出し、授業開始を待つことにした。

……次の休み時間どうやって過ごそうか。

十話

今日の授業が全部終わる頃私はぐったりとしていた。

「はあ……………」

他の休み時間は質問が来る前に図書室や、自習室に逃げた。

私のクラスから結構遠いんだよな……………。

すると、

「疲れているようだけど大丈夫？」

そんな言葉を言われた。

朝の質問攻めしまくる女子ではない。入学当初から話しかけて来る女子だ。

学級委員の早川美咲はやかわみさきという名前らしい。

「ああ、大丈夫。とりあえずな……………」

「篠崎さんがあんなに話していたの、初めて見た。」「いや、出来ることなら今日のことは忘れて下さい。つーか忘れる。」

「……………初めてこんなに話してくれるんだね。いつもは『……………うん』
もしくは『無理だ』とかYesかNoを答える程度だったのに……………」

クソっ……………。迂闊に話し過ぎた。

「じゃ、じゃあ私は帰らないといけないから……。」「えっ、ちょっと待って。篠崎さんって勉強出来るよね？」

「……………じゃあね。」

「あっ、待っ……………」

脇目もふらず私は逃げ出した。……………が、

「人が用件を話そうとしてるのに逃げちゃ駄目だよ。千遥」

どこからか湧いた馬鹿に手を掴まれた。

昨日の事を思いだすな……。

「面倒だもん。だから手を離せ。」

「駄目。ちゃんと人の話しを聞きましょう！」

「わかった！もう逃げないから……………」。「そう言ったら、手を離してくれた。」

「なんの用だ早川さん。出来る事ならさっさと終わるような事で……」

……………「勉強教えてくれる？」

「参考書を読もう。もしくは先生に教われ！」

「でも……………」

「はいっ、これ。昨日買った参考書。」

「こらっ千遥、教えてあげなさい。あと俺にも教えて欲しいな」

「オススメ参考書パート2とパート3だよ。ハイテンション馬鹿にはパート4からパート7まで貸そう。」「参考書じゃなくて、直接教えてよ。」

「断る！！」

結構しゃべって疲れた。そんな私を見て早川さんは、

「あっ、じゃあこれで大丈夫だから。ありがとう篠崎さん。」

早川さんは引いてくれた。でも、

「俺にはきちんと教えて。………優しく一対一で。」「気持ち悪っ
！」

俗に言う甘い声？とやらで耳元で囁かれる。多分他の女子なら顔を
真っ赤にしたりするだろうな。

でも私にはそんな可愛いげは全くない。

以外な反応だったのか悔しいそうな顔をした。

その顔を見て私は少し勝ち誇った顔をした。

「ふがつー!!」

「駄目だよ。人が少し落ち込み気味なのに……。」
鼻をつままれた。

「全く、本当に意地悪な子だなあ。勉強くらい教えてくれたってい
いじゃん。」「私にメリツトは？」

「教える能力がつくよ。」「必要ない。」
「必要だよ!!」

ああ、長い。やり取りが長すぎて疲れた。

十一話

長いやり取りをなんとか終わらせるために、仕方がないので図書館で勉強を教えることにした。

「ここは？」

「それは×が0になるように代入すればいいだろ馬鹿野郎。」

「……………？どうやって？」 「教科書見れば。」

「何ページ？」

「62ページ。」

それにしても…………、どうして基本問題が出来ない？

「めんどくさい。」

「そんなこと言うなよ。あっ、チヨコあげるよ！」 「いらない！」

「えっ！君ってチヨコ嫌いななの？」

「……………」

チヨコは嫌いではない。むしろ大好きだ。ただ勢いで言ってしまった。

「そんなことより勉強に集中しろ！！そろそろ帰るからな。」

「ええっ、もう？」

「やっぱり今すぐ帰るから。」 「じゃあ問14が終わるまで。」

「……………」

面倒なので参考書を開き「ここ見りゃ分かる。」と言って私は帰る準備をした。

奴は参考書を見て、「こんなものじゃ分からない。教えてよ。」と

言ったが、無視する。

さて、駅に向かうか。

図書館なのに騒ぎ出す馬鹿は他の人に注意を受けている。

その隙に図書館の出口に向かった。

十一話（後書き）

感想・評価があればお願いいたします。

十二話

なんやかんやで家に到着した。

家に帰る途中、外国人観光客に道を聞かれた。

……英語だったがほとんどわからねえ。

仕方ないだろ。英会話は苦手だ。

「お前の英語は理解するのが不可能だ。」と日本語で言ってその場を去った。

薄情な奴と言われようと私にはどうでもいい。

まあとりあえず家に着いたので家事を済ませる。

ほとんど昨日と同じような事をしているがいつもの習慣なんだ。仕方ないだろ。

ふう、と一息ついているとケータイがなった。

奴だ……………。

とりあえずケータイを見てやる。メールが届いた事を知らせるランプがついている。

メールには……………、

『どうして帰ったの？まだ勉強途中なのに(´・`・´)』

と、書いてあった。無視しよう。

シャワーを浴びた後、またメールが来ていた。

『無視するな』（T―T）返信しなさい！』
こいつ女か？

20分くらいたってさらにメールが来た。

『寂しい（T T）ウルウル。構ってくれないと死んじゃう』
ウサギ気取りか？

とりあえずだるいので寝よう。メールは放っておくことにした。

メール拒否するにはどうやってやるんだ？

十三話

今日は初めて寝坊をしてしまった。
まあ、学校は遅刻しなかったがな。

とりあえずギリギリな時間に教室に入って来たので奴に会うことはなかった。

……今度からギリギリに来るようにしようかな。

そんなふうに考えていると先生が教室に入ってきた。

先生は連絡事項を話してから教室から出る時に、「篠崎、後で話があるから職員室に來い。」と、言われる。

大概ね奴なら怒られると予想するだろう。

だが私は悪い事は一つもやって……、怒られる用な事は多分やってない。

昨日外国人放置したが……。

とりあえず職員室に向かうことにした。

職員室で先生に、「話しはなんでしようか？」と、用件を聞いた。

「ああ、篠崎は今一学年のなかでトップだったよな。しかも、入学

してからその座を誰にも譲らず。」

「はい。」

成績に関する話か？

「それで頼みたい事があるのだが？」

「何ですか？それは成績に関係しますか？関係しないのでしたら断るつもりですが？」

「なっ！」

どうやら成績に関係なさそうだ。私は自分にメリットがなければ頼みを受ける事が大っ嫌いだ。

「そう言わず、クラスメイトのためにやってくれないか？」

……、私は別にこのクラスに入りたくて入ったわけでもない。

「何をするのですか？」

「勉強の仕方のコツをクラスのみんなに教えてくれないか？お前は頭が良いが他の生徒はそうでもない。前のテストでは平均点が他のクラスに比べて一番低かったんだ……。」

「それは生徒のやる気の問題じゃないんですか？もしくは先生の教え方が良くなかったのでは？」

先生は口ごもる。

「じゃあ篠崎はいつもどうやって勉強しているんだ？参考程度に聞きたい。」

「いつも参考書を読んでいます。」

「それだけか？」

「はい……。」

勉強の仕方なんか人それぞれだろ。いつまでこんな話し聞かされるんだ？

「先生。もうすぐ授業が始まります。教室に戻って良いでしょうか？」

「わかった。いいだろう。今のことでできればもう少し考えてくれるかい？」

「……わかりました。」

とりあえずこの場をしのぐ言葉を言い、私は職員室を立ち去った。

自分で勉強教えればいいのにクソ教師と、私は呟く。

十四話

私が戻って、少ししたら授業の始まりを告げるチャイムが鳴る。

化学の授業だ。

化学はかなり得意だ。と言うより、理数が得意と言ったほうが良いだろう。

あとは社会などの暗記も得意だ。

英語や現代文が少し苦手だ。まあ、それでも理数と比べてだ。

とりあえず化学の教科書を開く。今日は酸と塩基についてだ。

ぼんやりしていると、先生に問題をあてられる。

……もちろん完璧に答える。

先生は「よるしい。」と、少し悔しそうな顔しながら言った。

私に恥をかかせようとしていたみたい。百年早いぜ。

ある程度時間が経ち、チャイムがなった。授業が終わりだ。

先生は皆に宿題プリントを配り、教室を去った。

休み時間に図書室に行こうか迷っていると……、後ろから抱きしめられた。少し苦しいぞ。

「……なんでメール返さないんだ。」

怒りが籠っている声。何故か言い返す言葉が出なかった。

「べつに……、いいだろ？どうでもいい内容なんだから。」

「どうでもよくない！！」「……っ！！」

私はなぜかこの男の怒りが怖く感じてしまつ。ただの馬鹿が吠えて
いるだけなのに……。

「千遥？」

「すまない……、場所を変えてもらえないか？」

「……わかった。」

私達は教室から出て、人がいないような場所に移動することにした。

十四話（後書き）

ユニークが1000人を超えました。

こんな小説を読んでくださりありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。(^-^)

十五話（前書き）

今日ちゃんと投稿出来なくてすみませんm（
）m

十五話

私達i n 自習室

「……………」

「……………」

空気が重過ぎる。

「あの……………」

「どうして人を無視したりするんだ。」

「うう……………」

自分が情けなさ過ぎる。こんな奴に説教されるなんて。

「あのな、俺は好意を持って君に接しているんだよ。きちんとその好意は受け取りなさい。」

「……………余計なお世話だ。」

私は上目遣いで奴を見ながら苦し紛れにそう言った。
そんな私を見て奴はため息をつく。

「千遥、どうしてそんなにひねくれ者なんだ。そんな態度じゃせつかくの青春がだいなしだよ。」

「青春なんていらないし、もうほっといてよ!!!」

すっつと息を吸い、言い放った。

「ねえ、私に近付かないで欲しい。」

そう言った時、私の頬に涙が伝う。

悲しくない、痛くない、苦しくない。

そのはずなのに……。

十六話

私はいい歳のはずなのに泣いてしまった。しかも奴の目の前で。

奴は私の頭を撫でる。まるで泣いている小さな子供をあやすような。

涙声で「なんで私に関わろうとするの？放っておいてよ……。」

奴の口が動く。

「そんなこと言うな。千遥は俺になんで関わって欲しくないの？」

相手の言葉に怒りは無かった。代わりに慈しむ心がやどっていた。

とつくに休み時間は終わっている。でも、そんなことを気にしてられない。

息を整えて私は言った。

「私は性格が悪い。付き合っても何も楽しくない。だからわざわざ距離を置いてあげているの。感謝しなさい。」

それを聞いた奴は悲しそうな顔をする。

「悲しい奴。」

「……ええ、まあ。」

「お前、面倒だな。」

「面倒ですがなにか？」

少しおどけながら私は言った。さあ、お前はどんな反応をするんだ？

奴は何も言わなかった。無表情で、感情を無くしてしまったように。そして「千遥はそんなこと言って辛くない？無理をしてない？」と言った。

「辛くない……よ。もうそろそろ私行くね。疲れちゃった。」

私は立ち上がり、教室に向かう。それを奴は呼び止められることはなかった。

やっぱりこんな奴にかまいたくないもんな。

なんで私は……こんな性格になったんだ？

十六話（後書き）

最近ネタが浮かばない。

ヤバイ……。

千遥「作者は私と違ってアホだからな。国語の期末試験の点数なんて6……」

龍斗「ダメだろう。作者の傷口に塩を塗ったら。千遥だって国語苦手だろ？」

千遥「前のテストは94点だったか？」

作・龍「……………」

千遥「まあ、馬鹿とボケはほっといてこれからもよろしくな。……と、台本に書いてあった。」

これからもよろしく願います！……………本当に（泣）

十七話（前書き）

千遥「どうでもいい話だが私達は高校1年っていう設定だ。」

作者「千遥さん……、設定って言わないで（泣）」

千遥「馬鹿のくせに私の名前を気安く呼ぶな。」

作者「!?!」

十七話

教室に戻ってみたらまだ授業はやっていた。

先生に何故遅れたのか聞かれたが、「自習室で気分が悪くなり、休んでいました。」と、言ったら「まあいいでしょう。」と私に席に着くよう促す。

それなりに授業は進んでいたが、問題はなさそうだ。

ノートを開き、黒板に書かれている内容を写す。

隣の席の男子が「サボりか？」と書かれた小さな紙を私に見せる。

私はメモ帳に「まあな」と、書く。

「以外だな」と書かれた紙が戻って来る。

「まあ、アホなお前と違って理由がしっかりあるサボりだな」

と、書いて見せると眉間にシワをよせ、「アホじゃねえ、じゃあ理由教える」

……無理に決まっているだろう。

だって自分より馬鹿な奴に説教されて拳げ句泣いた、て言ったらプライドが……。

『お前に言う必要性は全くない』と書いて見せ、その後はもう相手から来る紙を無視した。

十八話（前書き）

龍斗「そういえば今日ってクリスマスイブだね。」

千遥「そうだな。」

龍斗「何か予定ある？」

千遥「バイトだ。」

龍斗「えっ！」

千遥「こういう行事は稼げるから嬉しいぞ。」

龍斗「……。」

皆さん、楽しいクリスマスを願います。（リア充以外の方限定）

十八話

……授業が終わってから筆記でやり取りした男子が私に話しかけてきた。

名前は高嶋風雅たかしまふうがと言うらしい。

髪の色は目がチカチカしそうな金髪で、えげつないほど着崩した制服。こんなのが女子どもにもてるから世も末だ。

「篠崎ちゃんって真面目そうに見えるけど意外な面があるんだねえ。」

「どちらかと言えばこっちのほうが素だが？」

「へえ……。」

筆記だとわからなかったがこいつは大体語尾が間延びする。

バカっぽいな……。

「用件はなんだ、お前に関わっている暇なんかほとんどない、さつさとしろ。」「いやあ、だいぶ言葉遣いがきつくなつて来たねえ。」

「さつさとしろ生ゴミが！燃やすぞ。」

「凄いこと言つたなあ。用件はなあ、今度合コンやるんだけどお、来てくれるかなあ？」

「断る！」

「気の強い女が好きないケメンがいつぱいだぞお。」「だが断る！」

私はそう言ったが奴は引かない。「見学程度でいいからあ。」「とか

「マジでイケメンばかりだぞお。」など言った。

「他の子誘いなよクズが……。」

「俺にそういう言葉を吐ける女子はお前くらいだよお。」

「……。」

「もしかして好きな奴とか彼氏いるのお?」

「いないに決まってるリサイクル不能ゴミが。」

「じゃあ決定なあ。場所はカラオケ『Let's Song』だからなあ。時間は今日の4時からだからあ。」「ちよつとまで……私
は行かなねえ」「じゃあなあ。」「オイ!」

と、勝手に奴は言っでどこかに行った。

クソっ何なんだ。男難の相でも出てるのか?

……そうだ、先生に朝の件断りに行かないと。

十八話（後書き）

千遥「……………」。

龍斗「……………」。

千遥「さっきから機嫌悪いな。」

龍斗「……………」。

千遥「黙りこむな。しょうがねえからプレゼントをやるつ。感謝しろ。」

龍斗「何？何をくれるんだい。」

千遥「参考書セット中学の分だ。」

龍斗「……………」。

千遥「……………あれ？」

十九話（前書き）

龍斗「クリスマスだ〜！」

作者「……………」

龍斗「……………小説の主人公がいないんだけど……………」

作者「バイトって言ってただる馬鹿が。」

龍斗「作者まで性格悪っ！何のバイトかな？」

作者「しらねえ。」

龍斗「……………」

十九話

職員室に入ると先生が「考えてくれたかい？」と期待を込めた声で言ってきた。

「残念ながら私は答えを変えるつもりはないです。他の……、例えば2番目に頭がいい人とかではダメなんですか？」

「……、この前の期末試験でほとんど満点だったそうだな？」

「はい。国語以外は。」

「苦手と言っている国語も90を超えているだろ。2番目の人の得意科目と同じ点数だ。」

「なるほど、私より下は差があり過ぎるんですね。」「最近この学校の学力が落ちている。特に私のクラスが。だが、君は今まで学年首位を誰にも譲っていない。頼む……、他の子に勉強のコツを教えにくれるか？」

「先生が教えればいいんじゃないですか？そもそも教師ってそれが仕事ではないんですか？」

「……。何回かやってみたよ。でも最近の子はだいぶ強情で、その上親御さんが……。」

「とにかくうるさい人が増えていて、先生が補習みたいなことをやると色々大変で、だけど級友が教えれば問題ない、というわけですね。」

「……ああ、情けないが。」

「すみません、最近忙しくて……。」

「……いや、こちらのほうがすまない。無理を言ってしまった。」

先生に一礼し、職員室を出た……瞬間、「千つ遙々！一緒に帰ろう」

……、何故ここに来た。

「千遥は電車通学でしょ、俺もだよ。だから一緒に駅まで行こう！」
「ちよつとまで、さっきまでの変な気まずさはどうした。」
「べつにいいじゃん！そんなことより私は用事があるんだ。」
「何？俺も付き合っよ。」
「合コンだ。」

……、また変な空気になると思ったが、嘘はついてない。

奴は驚いた顔をした。「ええ！合コンするんだ！」声がデケエ。職員室の前だぞ。

「悪いか？まあ強制されただけだがな。」
「……ふーん。」

なんでそんな顔するんだ？

「千遥は彼氏欲しいの？」
「全然。どうした？」
「いや……まあ。」
「？」

なんかよくわからないが、不満げな態度だ。

「誰に誘われたの？」
「私のクラスの……高嶋って言う奴。」
「金髪の人だよな。」
「まあな。」
「断ってあげようか？」
「ああ、べつにいい。」
「なんで？」
「いや、私からしてみてもお前になんてか聞きたい。」
「千遥がいやかなって思ったから。無理強いするのは良くないこと

だし。」

「まあ、面倒がしょうがねえ。」

「……。」

黙りこんだよこの人。なんで？

「千遥って、少し馬鹿だね。」

「なっ、聞き捨てならねえ。どこが馬鹿なんだ。」

「……。」

「オイっ、黙るな！」

心外だ、私が馬鹿に馬鹿と言われるなんて。

奴にどこが馬鹿か聞こうとしたが奴は黙りっぱなしだった。

十九話（後書き）

龍斗「サンタさんからプレゼント貰った？」

作者「貰えるわけねえ。」

龍斗「……………」

二十話

……胸糞が悪い。私が馬鹿にされた。

まあ、とにかく合コン会場に行つてやるうではないか。

とりあえず私はカラオケ『Let's Song』とやらに来てみた。すると「やあ、ちゃんと来てくれたんだあ。」と、高嶋が来た。

……その格好はなんだ。軟派な格好しやがつて。

「制服のままなんだねえ、だったらスカート短くすればあ？」

「余計なお世話だ。」

「まあ、いいよお。じゃあ行こうかあ。みんなもう入ってるからあ。」

「ずいぶん早いな、4時までもう少し時間があるぞ。」

「まあみんな舞い上がっていたからねえ。」

……不思議な奴らだ。

「そつだ、君のメアド教えてえ。」

「断る。」「まあべつにいいけど他の人もたぶん言うよ。」

「全部断る。」

「結構しつこい人もいると思うよあ。」

「だが断る。」

「……、じゃあ行こうかあ。」

とりあえず合コン会場内に私達は入って行つた。

カラオケは初めてだが、変な感じでもないな。ちょっとづるさそつ
だが……。

まあ、初体験ということで大目にみてやろつ。

二十一話(前書き)

今日はバイトでこの話しか投稿できませんm()m

二十一話

Side 龍斗

最近不思議な子を見つけてしまった。

見た目は真面目そうなのに言葉遣いがきついにもほどがある子。

なんとというか……、考えがひねくれている？のかな。
だけど頭がものすごくいいらしい。羨ましいな。

仲が良い人は誰もいないらしい。ならば俺が友達第一号になってやろう。

きつと今まで寂しかったからひねくれ者になってしまったのである
う。

だけど俺が友達になろうと言っても拒否される。なんでだ？

自分で言うのもあれだが顔は整っているほうだし、話も面白いって
クラスメイトにも言われた。

それでも嫌悪感丸出しの顔して断る。

……軽くシヨックだ。

まあ、それでも頑張ったら勉強教えてくれたり（途中で帰っちゃっ
たけど）メアドも交換したし、友達っばいよね。

早速メールをしてみた。もしかして恥ずかしがり屋で直接本音を言えない子なのだろう。

きつとメールを見て返信してくれるはずだ。

……………、返信が来ない。

なんでだケータイの使い方がわからないのか？それはないだろう。

もしかしてわざと？……………少し有り得る。

本当になんで返信しなかったのか次の日、聞いて見た。少し言い方が怖くなってしまったが案の定、焦った様に答えた。

やっぱり無視していたみたい。……………。

とりあえず何故こんな態度なのか聞いてみようと思った。

場所を変えて欲しい、と言われてとりあえず自習室に行った。

自習室では色々言われた。そして……………、

「面倒ですがなにか？」

涙声でおどけながら俺に言った。

様子を伺うような上目遣いで俺の反応を見ている。

俺は無表情になった。

その反応を見てどう感じたのかわからないが、教室に帰ってしまった。

俺は、その様子がとても悲しそうだった。

……よし、次会ったら明るく接してみよう。

ちょうど授業が終わって千遥を探すと、職員室から出て来た。

ラッキーと思いながら一緒に帰ろうと誘う。

だけど……、合コンに行くらしい。

なんでだ、彼氏でも欲しくなったのか？

そう聞くと「全然。」と帰って来たことにホッとした。

誘われた人が誰か聞くと、どうやら高嶋風雅に誘われたらしい。

風雅か……。面白い子がいると大体誘うんだよな。

風雅とは腐れ縁だからこの子の代わりに断ってあげようかな、と思ったがべつにいいと言われてしまった。

納得いかないな。だけどあまりに突っ掛かると変に思われる。だから……、

「千遥って、少し馬鹿だね。」

そんなことを言ってみたら千遥は少し怒った反応をした。

理由を聞かれたが、ずっと黙っていた。

二十二話

会場に入ると私服の奴と制服の奴がいた。制服の奴は同じ学校と、隣の学校のものらしき学ランだ。

私達の学校は男女共、紺色のブレザーだ。ただ女子のはジャケットに近い。

男子は青系のネクタイに少し濃い灰色っぽい色のスラックス。

女子は青系のリボンに青系のスカート。そして黒のハイソックスだ。デザインだけはいいので、私立に間違われることがあるが公立だ。偏差値は上の中だったが、最近落ちているらしい。

まあ、関係ないがな。

とりあえず自己紹介をしると言われた。

「私は篠崎千遥だ。質問があるなら受け付けてやろうではないか。」
やや傲慢な感じになったけどまあいつか。

「はやたけい早田慶だよ。よろしく。」

真ん中に座っていた男子が名乗ってから他の男子も次々名乗る。

なるほど、高嶋が言っていた通りそれなりに美形揃いだ。

他の女子なら泣いて喜ぶだろうな。

集まっていた女子が、男子が自己紹介を終わったのを確認すると、自己紹介を始める。

女子達も顔のレベルが高い子ばかりだ。

……私への当てつけか？さっきゴミ扱いたから平凡な顔の私への復讐か？ふざけんじゃねえ。

とりあえず一番入り口に近い方の席に座る。

高嶋が歌い始めた。恋愛ドラマの主題歌らしい。

臭い台詞が並べられていて聞いているこっちが恥ずかしい。

ぼんやりと聞いているといつの間にか早田が私の隣に来ていた。

二十二話(前書き)

更新を忘れてたorz

二十三話

「千遥ちゃんは何が食べたい？」と、メニューを見せながら早田は言った。

メニューには色々書いてあった。が、それにしても高いな……。

「ああ、このチョコレートは詰め合わせがいい。」「わかった。今頼んであげる。」と、言って電話ののような機会注文した。

「チョコレートが好きなのかい？」

「まあな。」

「そつかあ。ねえ、一緒に歌おう！」

「断る。」

そう言ったら相手が驚いた顔をする。

早田は割とインテリ美形と言った感じだ。まあ、インテリかどうかは知らねえ。

すっつ、と調子を戻し「じゃあ雑談しよう。」と、言った。

「それならいいぞ。」

「千遥ちゃんはここ近くの公立の高校だよね。」「ああ。」

「へえ、僕は藤谷大学附属高校だよ。」

「ほう、こここの市内で一番の進学校か。」

「うん。」

私達の学校は県立東高校と言う。東と書いて（あずま）って読むらしいぞ。

東高校もそこそ有名な進学校だが私立には勝てない。藤谷大学附属高校は市内、もしかしたら県で一番の学校だ。コースがあり、一番下のクラスでも私達の学校よりちよつと下程度の学力だ。

私は受験の時、滑り止めで受けた。もちろん受かったが、公立に受かってしまったからやめた。

「俺はどちらかと言えば公立に行きたかったな。」

「どうしてだ？」

「だって校則緩いじゃん。楽しそう。」

「……でも逆に変な奴も多いぞ。」

「例えば？」「意味不明な金髪野郎。」と、言って高嶋を指差す。

早田は高嶋を見て爆笑する。

他の女子としゃべっていた高嶋は怪訝な顔をする。

「確かにこつちには金髪がないよ。」

「そりゃ、そんな奴いたら即停学だろ。」

「たぶんね。」

少し雑談していたら「ご注文の品をお持ちしました。」と、店員らしき人がくる。

私が注文した物の他に唐揚げやポテトなど大人数向けの食べ物が運ばれる。

とりあえずチョコレートに手を付ける。

うん、まあまあだ。

むぐむぐと食べていると他の人もチョコレートに手を伸ばす。

割り勘らしいので色々食べないと損だ。

さっき雑談していた奴も唐揚げにかぶりつく。

脂が滴っていてなかなか美味そうだ。

初めての合コンはとりあえず色々食べてごまかさう。

私はチョコレート（8個目）を食べながらそう思った。

二十三話（後書き）

年末年始はもしかしたらなかなか更新できないかもしれません。

二十四話（前書き）

あけましておめでとうござります。〇（>・>）〇

更新を再開します。

二十四話

「ねえ、そんな地味な子より私とお話をしません？慶君。」
失礼にもほどがある言葉を言いながら早田の隣に座る女がいた。

確か浅倉椎奈あはくへいしいなっていう奴だ。

早田は苦笑いしていて、他の女子が「人を侮辱してはダメですよ。」
本当の事でも。」と、明らかに私へ喧嘩を吹っかける言葉を言った。

……………殴っていいかな？

人がせつかく耐えていたのに、「邪魔ですわ、身の程をわきまえないさい。馬鹿女！」

……………。

「オイ、やめろよ！かわいそうだろ！」と、早田が言った。

「女って恐っ！」と金髪馬鹿が言う。

「……………なあ、少し言っただけいいかな？」

「何よー！」

うわー、やっぱりごうごういう女嫌だわ。男子めっちゃ引いてるぞ。

「どうでもいいけどなんで私が馬鹿女なんだ？頭は良いほうだ。」

「そういう事じゃないわよ！貴女が慶君と全く釣り合っていないのよ。」

「！」

「釣り合う？なにが？」

「容姿よ！貴女よりも私のほうが全然美しいわ！」

「え！？お前って美人なのか？」

「そうよ！！」

……………この人ダメだわ。

「あー、お前らさあ。」

「何よ！」

「気合い入れて化粧するのはいいが、正直ケバい。バイオ○ザードのゾンビみたいだ。」

クスツと鼻で笑ってやる。「なっ、なんですっ「わははははっ！」ちよつと風雅君。」高嶋が笑い出し、他の男子も釣られて笑う。かろうじて早田は笑いを堪えてる。

他の女子も焦ってる。馬鹿みたいに「私って大丈夫かな？」みたいな会話を小声で話し合っている。

そんな女子どもを見て私も笑う。

浅倉は顔を真っ赤にして「ひっ、酷いですわ……………。この私を侮辱するなんて。」

「はあ……………、先に私を馬鹿にしたのはお前だろ。因果応報ってやつだ。」

「……………っ！ふん。貴女って本当に性格悪いわ。」「それが？」

短い切り返しに浅倉が言葉を詰まらせる。

「貴女って「オイ、やめてくれ。」ちよつと慶君。」

不意に早田が言葉をはさむ。呆れたような声だった。「浅倉さん、いくらなんでも千遥ちゃんに言い過ぎだよ。千遥ちゃんもゾンビっ

「て言っちゃダメ……プツゴメン。」
笑いこらえるなよ。何げに浅倉にダメージ余計に与えているじゃん。
どうでもいいけど。

早田の説教？が終わってから「あの、そろそろ時間だよ。」と金
髪馬鹿が言い、とりあえず合コンはお開き？になるらしい。

初めての合コンは結構不愉快だった。

二十四話（後書き）

バイオ○ザードのネタは学校に化粧してきた人が男子に影で言われてた言葉です（ ; ; ）

私の学校の男子は薄化粧が好みらしい。（私はつねにすっぴんだ。面倒だから）

二十五話

カラオケの室内は熱気が籠っていて暑かったが外はだいぶ日が暮れていて、寒かった。

さっきまで言い争っていた奴は「寒いわ 慶君。」と、言いながら早田に引っ付いている。

早田は軽くあしらってから私の方へと近付く。

なんだ？と思っているとおもむろにケータイを取り出すと、「メアド交換しようよ。」と、言ってきた。

……浅倉は驚き、「私のはどうです？」と言っていたが、無視されている。

「断る。」

「どうしてだい？」

「答える義理はない。」

「……そう、じゃあ紙に連絡先書くからいつでも連絡してよ。」

紙を渡されたが、みんなの前で破り捨てる。

「必要ない。」と、言って私はその場を立ち去った。

駅に向かう途中「ちょっと待ちなさい！」と、言う声が聞こえて無視したが腕を掴まれる。

最近人を無視すると腕を掴まれるな……。

振り返ると浅倉が怒った顔をして私を見ていた。

「慶君のご好意をなぜ無駄にするのかしら。本っ当に貴女って最低ね！」

「……あつ、言う事ってそれだけ？」

「えっ？」

「そんなどうでもいいこと言うために追い掛けて来たの？」

「どうでもいいわけ 아닙니다わ！慶君の気持ちを踏みにじっていませんわ。」

「じゃあどうすればいい？そろそろ帰りたい。」

「慶君に謝りなさい！」

「わかった。」

私は早く帰って寝たいので早田のところへ行く。

「あー、ゴメン？」

「あ、ああ……。」

疑問形（しかも棒読み）で謝ったがいいみたいだ。キーキー後ろで抗議の音が聞こえたが無視。

帰ろうとしたらすつと何かを差し出される。

「やっぱり貰っておいてくれる？」と、メアドが書いてある紙を出される。

いつの間にか書いた？と、聞きたくなくなるが、まあいっか。

最近人としやべることが多くて疲れた。早く帰ってゆっくりしたい。

そう思い、いつもより若干遅いペースで歩きだした。

二十六話

ゆっくりと歩きながら駅に向かいながら小さな紙を見つめる。さっき貰った早田の連絡先だ。

字は、慌てて書いたらしいので少し下手くそだ。

連絡しなくてもいいよな、と思いつつ破ろうとしたら誰かが紙を奪い取る。

「誰の連絡先？」と、奪いとった奴が言う。

「べつに言わなくてもいいだろ。」

「え、じゃあ返さないよ。」

「いいけど。」

そんなやり取りをする。

「もしかして男？千遥も隅に置けないな。」

奴がおちやらかながら言った。

「まあ、男だ。」

そう言うと奴は驚き、ふて腐れるような顔をする。

「連絡するの？」

「しない、面倒だ。」

「……………」

「変だな。」

「えっ!?!」「いつもなら『相手に悪いからちゃんと連絡しなさい。』

『とか言ってるだろ?』
奴がなぜか黙り込む。

「まあ、どうでもいいけどな。」

私はとりあえず奴から離れようと早足で歩く。だけど奴はすぐに追いつく。

足の長さの違いを見せつけてるのがコノヤロー。

いくら頑張っても奴から逃げ切るのは難しいのでペースを戻す。

「千遥ー。」

「なんだ。簡潔に話せ。」「好きなタイプってどういう人?」

「……なんで聞くんだ?」「いーじゃん。」

「あー、わからない。」

「えっ?だって自分の好きなタイプだよ。自分が一番わかっているじゃん。」

「人を好きになったことがない。っーかなれないかもしれない。」

「えー。」やや不満そうな顔をする。

「じゃあ顔で選ぶ?性格で選ぶ?」

「どうでもいいけどな。」「じゃあ学力で選ぶ?体力で選ぶ?」

「あー、体力かな?まあ私より頭いい奴もいいな。」「……千遥っ

て学年何位?結構頭いいらしいけど。」「教えなくてもいいだろ。」

「じゃあ前の1番よかったテストの科目は?」

「数学と化学だ。」

「スゲー、でもうちのクラスの岸下きしたには千遥でも敵わないと思うよ。」

「誰?」

「クラスで1番頭がいいんだ。しかも3位だったのに学年2位にな

「つたんだよ。凄くない？」

「なんだ、1位になってないじゃん。」

「えー、でも1位の人は知らないな……。まあ多分2組のガリ勉君だよ。」

2組のガリ勉野郎は知ってる。模試で会った奴だ。

「まあとりあえずこんな無駄話はやめよう。」と、言って会話は途切れた。

二十七話

「あつ、そつだ。」

私はそう言つて立ち止まった。奴はどうしたといわんばかりに私の方を見る。

「なんで合コンをしていた私と同じ時間に帰っているんだ？部活でもやっているのか？」

時間的に少しおかしい。学校が終わるのは3時半頃。
2時間半くらい空白があるぞ。

「ええっ！ああ……、聞きたい？」

「べつに言わなくていいがな。」

何かよくわからないが妙に焦ってる。

「そーいえば千遥って最近悩み事ってある？」

「あるぞ。例えば勝手に誰かさんに『千遥』って呼ばれるし、最近うっとうしいのが付き纏うし、それから……。」

つらつらと悩み事を言っていくとだんだん奴が暗くなっていく。

「千遥って俺の事、どう思っているの？」

「面倒な奴」

「うぐっ……。」

あーあ、本格的にがっかりしている？らしい。優しい子とかなら慰

めるだろう、があいにく私は優しくない。

「だってそっちが勝手に私に近寄っただけだろ？」

「でもさー、心を開くみたいなさ、可愛いげがあってもいいだろ。野性の動物が懐くみたいなの？」

「はあ？」

可愛いげ？そんなもん焼却炉に捨てたわ。それ以前に私を野生動物だと？

「私は東京で生まれて4歳でこの町に来た。野生ではないぞ。」

「いや、例えだから……でも動物は否定しないんだ。」

「霊長類だからな。」……？

「ヒト類やサル類とかサル目の総称……、それくらい常識だろ。」

「ふっ、常識に囚われないのが俺のモットーだ！」

「……………」

「お願いだから人を馬鹿にするような目で見ないで……、少し傷つくから。」

「私には全然問題ないから。」

「俺に問題あるから。」

はあ、私はいつまでこいつと話しているんだ？

「そろそろ私はダルいのでしゃべるのをやめるぞ。」「えっ！」

「……………」

「千遥、ねえ答えてよお話そうよお。本当に黙ったまま？」

「……………」

そのあと色々しゃべりかけたりつつかれたりしたが私は黙り通した。

奴の悲愴な顔がたまらなく面白かった。

二十八話

家に着くと人の気配があつた。泥棒？かと思つたが違つた。

「……千遥か。お帰り。」「帰つていたんだ。」

父さんがいた。いつもは深夜に帰っているらしいが稀にこの時間帯に帰る事がある。

「ご飯はこれからだけどいいか？」

「……ああ。」

適当に買つてあつた魚を焼き、みそ汁をつくる。ねぎを切っている
と、

「千遥、学校どうだ？」

と、聞いてきた。

「成績はべつに変わりないぞ。」

「成績じゃない。人間関係だ。」

「関係ないだろ。」

はあ……と、父さんがため息をつく。

「社会人になるには人間関係を築くのが大切だ。お前のその考え方は正直、直すべきだ。」

「あーあー、ワカリマシタ。」

「あのなあ……。」

説教はやめてくれ。最近似たようなことを言われたから余計に腹立つ。

「父さんは……、仕事どうなんだ？」

「まあまあだ。」

「あつ、そ。」

父はこの町の総合病院で勤務している外科医だ。たまに薬品の臭いがする。

「そうだ。」

「何？」

「今月の生活費。」と、言って金を渡される。

「多過ぎる、これの半分くらいでいい。」

そう言ったが、「余ったら自由に使っていい。」と言われた。

それで会話は終わった。そのあとは私が料理をする音が家の中に響いた。

二十九話

ご飯を食ってから1時間経って、なんとなくケータイを開く。メールが来ていた。あいつだ……、

『夕飯何食べた？俺の家は焼肉だよ』

『適当』と、書いて返信してあげた。少しうらやましいな。焼肉なんて私の家はほとんど食べない。

しばらくしてから『具体的に何食べた？』と書かれたメールが来た。面倒だな。『2日前に買ったアジの開きを焼いた物を1枚と分量で作った豆腐とワカメのみそ汁と家にあった野菜で作ったサラダとご飯1杯。あと昨日作った煮物と漬け物少々だ。』と、書いて送った。結構長文になったな。

これにばかりかまわっているのも時間の無駄だ。とりあえずシャワーを浴びることにした。

シャワーからあがるとメールが来てた。内容は『かなり具体的にありがとう(汗)あつ、料理出来るんだ。すごい』と書いてあった。

……それくらい出来て当然だろうと思ったので『当たり前だろう。』と、書いて送った。少ししてからまたメールが来た。

『得意料理ってなに？』と書いてあった。

あー菓子だな。だから、『お菓子だが文句あるか？』と送る。

『文句ないよ(^^:;)お菓子かー、なんか女の子らしいね。そつだ、なんか作ってほしいなあ(^^人^^)。』

『断る。』

そう打ってケータイは放置することにした。ちゃんと返信したから怒らない……と思う。

ケータイを使ってたせいで目が痛い。もともと目が悪いけど余計に悪くなったらどうするんだと、思っていたら睡魔が襲って来た。ちよつどいい時間なので寝ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4570z/>

ひねくれ女子高生は面倒ですが何か？

2012年1月6日20時51分発行